



Title	日韓語の友人同士の自由会話における不同意表明の仕方：不同意マーカ―と文末の緩和表現を中心に
Author(s)	張, 允娥
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 142-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73645
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日韓語の友人同士の自由会話における不同意表明の仕方

—不同意マーカ―と文末の緩和表現を中心に—

張 允娥

【キーワード】 日韓対照、自由会話、不同意ストラテジー、不同意マーカ―、緩和表現

【要旨】

本稿では、日韓語の友人同士の会話における不同意表明ストラテジー、ターンの始めに見られる不同意マーカ―、不同意表明発話の文末に見られる緩和表現を分析した。日韓の差を中心に分析結果をまとめると以下のようである。

- (A) 日本語の会話：話者は見せかけの同意を表してから不同意を表明したり、マーカ―を連鎖したりすることで相手のフェイスに配慮を示す傾向があり、自らの不同意表明の発話が相手に誤解されず、受け入れられるように発話内容の力を和らげる緩和表現を用いながらいくつかのストラテジーを組み合わせて不同意を効果的に表明する傾向がある。
- (B) 韓国語の会話：話者は一つのマーカ―のみを用いたり、マーカ―を使用せずにすぐ一つのストラテジーを用いて簡潔に不同意を表明する傾向がある。不同意表明の際には、疑問詞／疑問語尾を用いて相手にすぐターンを渡したり、自分の意見の妥当性を伝えながら相手の同意を導くような相手に働きかける度合いが高い緩和表現を用いる傾向がある。

1. はじめに

日常的な友人同士の会話で、会話の参加者は、様々な事柄について自分の意見を表現したり、お互いに意見を聞いたりしながら相手の認識を確認する。相手の意見に同意や共感をしている場合、会話の参加者は共通基盤を確認しつつ円滑に会話を進めていく。しかし、お互いの意見が異なっている場合、会話の参加者には二つの選択肢がある。一つは不同意を表明しないことであり、もう一つは(1)と(2)のように、相手の先行発話に対して不同意を表明することである。

(1) 会話 FK4¹⁾ [KDF8: 積極的な反応を見せなくても彼氏は許すべきであると話している]

01 KDF8: 이러면 봐줘야지 사귀지도 얼마 안됐잖아

(こうすると大目に見てくれない 付き合ってからあまり((時間))経ってないじゃん)

02→KCF7: <@사귀지도 별로 안됐으니까@> 더 그러면 <@안되는거 아니야?@>

(付き合ってからあまり経ってないから もっとそんなこととしてはいけないんじゃないの?)

1) 会話 ID は、左から (1) 性別、(2) 国籍、(3) 会話を区別するための数字であり、話者 ID は、左から (1) 国籍、(2) 話者の個人記号、(3) 性別、(4) 話者を区別するための数字である。

(2) 会話 MJ4 [JYM8:アニメーションのキャラクターについて]

01 JYM8:「あ もう 磯野カツオは もう たぶん 出世するな:」思いながら見とったわ
 02→JDM7:でも なんか (0.3) う::ん 誇っていいところかどうか<@分からんけどな@>

相手の発話内容に不同意を表明する行為は、Brown & Levinson (1987) の言うフェイス侵害行為 (FTA) であるため、(1) のように疑問表現を用いて相手の意見を再確認することで不同意を表明したり、(2) のようにターンの始めに「でも」、「なんか」、「うーん」のようなマーカーを用いて自分のスタンスを表しながら、「けどな」のように文を言い切らず不同意の発話を和らげて表明したりすることがある。相手の提案に対する反対意見の述べ方を分析した梶本 (2004) によると、反対意見の述べ方には2つの指向性がある。まず、相手の提案に対してすぐに否定的な内容を述べる「目的達成」指向性と、もう一つは、否定的な内容を示す前に「保留」や「容認」をしたりすることで対立を明示しない「対人関係配慮」指向性があるとしている。対照研究分野では、反対意見表明の仕方には異なる言語文化による差があることも指摘されてきた。まず、日中接触場面と中国語、日本語母語場面で、不同意表明発話のモダリティ表現使用を分析した楊 (2014) では、中国人は接触場面でも母語場面でも、断定的に不同意を示す発話が日本語母語話者より多いと指摘されている。日韓両言語における反対意見の表明の談話構造を分析した李吉鎔 (2001) によると、日本語の場合、「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」という同一パターンの構造が認められるのに対し、韓国語の場合、比較的自由に談話が構成されていることが多い。また、日本語母語話者と韓国人日本語学習者によるディベートのロールプレイを分析した李善雅 (2001) は、日本語母語話者が相手配慮に重点を置きながら意見を述べる一方、韓国人学習者が直接的な意志の表明をより重視していると述べている。日本語母語話者と韓国人学習者の不同意表明の仕方を分析した末田 (2000) でも、韓国人学習者の場合、直接的／明示的に不同意を表明すると述べている。

以上のように、相手の意見に反対や不同意を表明する発話に関する研究では、どのように不同意を表明するかという方略について言語間での差異を明らかにしている。しかし、従来の多くの研究では、ロールプレイ (梶本 2004、李善雅 2001b)、インタビュー調査 (李吉鎔 2001)、討論場面のデータ (楊 2014) を分析資料としたため、日韓両言語の日常的な友人同士の会話で、実際どのように不同意が表明されているかはまだ明らかではない。また、日韓語の相互行為の観点からターンの始めに見られる不同意マーカーの使用や述語に見られる緩和表現の使用にどのような日韓の差が見られるのかもまだ明らかではない。そこで、本稿では、日韓対照研究の観点から、日韓語の友人同士の会話における不同意表明の発話に焦点を当て、以下の3点について分析を試みる。

- I. どのような不同意表明ストラテジーが使用されているか。
- II. ターンの始めにどのような不同意マーカーがどのように用いられているか。
- III. 不同意表明発話の述語にはどのような緩和表現が用いられているか。

2. 会話データと分析対象

2.1. 会話データの調査概要

本稿で扱う会話データは、日韓の親しい間柄の男性同士と女性同士の日常的な自由会話であり（日韓それぞれ男性4組、女性4組、計16組の会話）、日韓における同性同士の親密な間柄の自由会話におけるポライトネスのあり方を探る目的で収集したものである。

会話の参加者は、日本と韓国の20代の男女で、日本人は関西地方の話者を対象とし、韓国人は京畿地方の話者を対象とした。会話の収録は、2012年から2016年にかけて、日本語の会話は大阪で、韓国語の会話はソウルと京畿道で行った。協力者には、普段から親しくて、自らのことを打ち明けることができる友達と自由に話す会話を50分くらい収録したいと前もって伝えており、自然な状態でデータを収録することを優先して録音場所を設定した²⁾。それぞれの会話を均等に分析するため、各会話の最初の部分と最後の部分を除いたそれぞれの30分～35分くらい（約500分）を文字化して分析対象とした。会話例の文字化表記は論文の末尾に示す。

2.2. 分析対象

2.2.1. 不同意表明の発話

まず、本研究における不同意表明の発話とは、「相手の先行発話について、同様な意見あるいは感情を持っておらず、反対していること、あるいは納得していないことを表す発話である」とする。

(3) 会話 FJ1 [JAF2 ドラマの決めセリフについて]

01 JAF2: かわいい:

02→JOF1: <@ かわくよくないよ 別に@> @ ><@ 好きなの?@><

不同意表明の発話は、先行する相手の発話に対するものであるため、不同意の対象になる相手の先行発話が必ず必要になる。((3)の不同意の02行目の発話は、先行する01行目の発話に対するものである)。

2.2.2. 不同意表明ストラテジー

李善雅(2001)は、異なる意見に対する最初の反応を、自分の立場表明を先送りにする「衝突回避³⁾」型と自分の立場表明優先させる「立場表明⁴⁾」型の2つに大きく分類している。平野(2006)は、相手の見解に対し明示的に否定・反対する「否定型」、立場が対立するよ

2) 録音の場所は、協力者に普段どこでおしゃべりするかを尋ね、自然な状態でデータを収録することを優先したが、どこでも良いと答えた場合はできるだけ静かな場所で収録を行った。

3) 下位分類：(1) 相手の意見に同意を表す、(2) 新たな質問をする、(3) 中立的な立場をとる。

4) 下位分類：(1) 自分の意見だけ言う、(2) 相手の意見に同意を表してから自分の意見を言う、(3) 相手の意見に疑問を呈す。

うな意見や情報を提供する「指摘型」、相手に情報や意見を求めることにより、暗に反対の意図を示す「発言要求型」、論題と関係ない情報や自分の感想を述べることで相手からの共感を期待する「共感期待型」の方略があるとしている。李善雅（2001）と平野（2006）の分類を参考に、本研究では友人同士の日常的な会話における不同意表明ストラテジーを次のように分類して分析を行う。具体的なストラテジーの例は以下に挙げた例を参照されたい。

- A. 【反対】：相手の先行発話の内容を否定・反対していることを明示的に表す。
- B. 【対立】：相手の先行発話の内容に対立する意見や説明を提示する。
- C. 【確認】：相手の先行発話の内容に関して情報を求めたり、相手の意見を（再）確認する⁵⁾。
- D. 【見せかけ】：これから不同意の表明を行う事柄について同意を表明したり、先行する相手の意見の一部に同意していることを表す。

会話 FJ2 [飛行機が落ちることについて]

JKF4:私本当に飛行機で死ぬのいややな JSF3:【反対】死なへんって JKF4:【反対】>落ちたら死ぬやん
 < JSF3:【見せかけ】=落ちたら死ぬけど【対立】よ::言うやろ 宝くじが当たるより落ちにくいって

会話 MJ1 [話題になった知り合いについて]

JAM1:まあ 泉南では<@話題の@> JBM2:【確認】え まじ? そんな そんなん話題になってる?<
 @なってる?@> JAM1:【対立】@@<@@おまえ泉南にいな::じゃん@>

2.2.3. 不同意マーカ―

次に、梶本（2004）が指摘したように不同意表明の発話の冒頭では「いや、でも」のようなマーカ―が観察されやすい。マーカ―の使用は会話の流れを円滑にする機能を果たすだけでなく、話者のスタンスを表す標識となる。マーカ―は、ターンのどこで用いられているか、どのような発話の前で用いられているかによってさまざまな機能を果たすが、不同意表明発話のターンの始めに観察されたマーカ―は次のように分類できる。A.意味的に<否定>を表す間投詞と接続詞、B.相手の先行発話に<驚きや不整合⁶⁾>を表す間投詞、C.聞き手を特定することで相手の<注目>を要求する呼びかけ、D.意味的に<因果関係>を表す接続詞、E.<曖昧化⁷⁾>を担う副助詞や間投詞の使用が観察されている。また、F.音伸ばしを

- 5) 疑問イントネーションで発話された場合や相手の疑問表現に対する回答が行われた場合のみを【確認】として認める。
- 6) 田窪・金水（1997）では、「えっ」は矛盾・関連性の低い情報の受け取りを表明するとしており、富樫（2001）によると「あっ」、「情報獲得」や「驚き」を示すことがある。韓国語の会話に見られる「아(あ)」もターンの始めに短く発話されて驚きや不整合を表しており、ため息の音やあっけないことを表す間投詞は不整合を表す。
- 7) 鈴木（2000）は、「不確実性の標識」が「なんか」の本質的な機能であると述べており、富樫（2002:24）によると「まあ」の本質的な機能は「ある前提から結果へ至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは計算に至る際的前提そのものが明確ではないことを示す。また、이한규（1999）によると 韓国語の「뭔」の基本意味は「確実ではない」ことであると指摘している。

伴うことで話者の<躊躇⁸⁾>を表す間投的な詞や肯定応答詞は日本語の会話で観察されている。日韓語の会話で出現したそれぞれのマーカーの表現形式は以下の通りである。

- A. <否定>マーカー：いや、でも、だって、아니(야) (いや)、근데 (でも、ところで)
그래도 (でも、それにしても)
- B. <驚きや不整合>マーカー：え(っ)、あ(っ)、아(あ)、에유 (ため息の音)、아이씨 (否
定的な感情を表す間投詞)、거참 (あっけないことを表す間投詞)
- C. <注目>マーカー：ほら、야 (おい)、인마 (こら)
- D. <因果関係>マーカー：だから、그러니까 (だから)、그럼 (それなら、すると)
- E. <曖昧化>マーカー：なんか、まあ、뭐 (まあ)
- F. <躊躇>マーカー：あー、あの(一)、う(一)ん

2.2.4. 文末に見られる緩和表現

不同意の発話は選好されない応答であるため、発話内容の力を緩和させる文末表現が用いられることが多く、述部が省略された言い切らない文の使用も多い。まず、白川 (2009) は、「けど」などの終助詞的用法のものは、強い断定を避け、語気を和らげる働きをすると指摘している。発話内容の力を緩和させる表現は、従来ヘッジ、ぼかし、和らげ、婉曲表現、緩衝表現などの様々な用語で研究されているが、言い切らない文を含め、これらの表現が断定を避け、発話内容の程度を緩和させる機能を果たしているという点は共通している。

まず、日本語の場合、佐竹 (1995) によると、文末の「-じゃないか」、「-とか」、「-みたい」、「だし」、「たりして」が、断定を回避する表現として用いられている。また、辻 (1996, 1999) は、「とか」、「っていうか」、「し」、「って感じ」、「みたいな」は、緩和や間接化の方略で用いられていると指摘している。また、メイナード (2004) は、「じゃないですか」、「くない」などの否定形が婉曲表現やぼかし表現として機能していると指摘している。日本語の研究に比べ、韓国語の研究では文末の緩和表現に関する研究は多く行われていないが、이찬규・노석영 (2011) は、「-것 같다 (みたい、らしい)」はヘッジとして使用されており、「-다고 하네요 (だという)」は責任回避の機能を果たしているとしている。

次に、日韓両国の友人同士の会話におけるヘッジを分析した研究には이은미 (2014) がある。이은미 (2014) は、ヘッジの種類、ヘッジの使用有無、ヘッジの使用頻度を分析しており、韓国語の会話では、36 種類のヘッジが用いられており、日本語の会話では 38 種類のヘッジが観察されていると述べている。その中で、文末に見られるヘッジは、韓国語の会話の場合、「-잖아(じゃん)」、「-(인 것)같다(ようだ/そうだ/みたいだ)」、「-(일)것이다(だろう)」の順で使用頻度が高く、日本語の会話の場合、「って」、「じゃない (か)」、「かしら/かな/かね」、「みたいだ」の順で使用頻度が高いと述べている。

以上の先行研究と筆者の収録した会話資料を踏まえた上で、本研究では不同意を断定的に表現せず、緩和的に表現するために用いられた文末表現として A から E を分析対象とす

8) 山根 (2002) では、「あの」は相手の負担にならないように発話を和らげ、相手への慮りを示す標識であるとしている。

る。日韓語の会話で出現したそれぞれの緩和表現形式は次の通りである。

- A. 疑問詞／疑問語尾：疑問詞を伴った発話や疑問語尾が使用された発話
- B. 否定形：やん、ちゃうん、じゃない(か)、-잖아(じゃん)、거 아니야(지 않아)(じゃない(か)、-(し)ない)
- C. 引用表現：って、っていう(か)、-라고(할까)(って、っていうか)、-대(という)
- D. 思考・推測表現：やろう、思う、感じ(だ)、수도 있다(かもしれない、ありうる)、같다(みたいだ)、느낌(이다)(感じ(だ))
- E. 言い切らない文⁹⁾：から、けど、て、し、とか(+終助詞)、名詞(+助詞)、때문에、니까(から)、예(けど)、고(て)、名詞(+助詞)、間投詞뒤(まあ)

3. 分析結果

ここでは分析結果について述べる¹⁰⁾。§ 3.1 では不同意表明ストラテジーについて述べ、§ 3.2 では不同意マーカ―を分析した結果について述べる。§ 3.3 では、不同意表明の発話の述語にどのような緩和表現が用いられているかについて述べる。

3.1. 日韓の会話における不同意表明ストラテジー

まず、相手の意見に対して不同意を表明する際、日韓語の友人同士の会話でどのようなストラテジーがどのように用いられているか見てみよう。以下の表 1 は、日韓語の会話におけるそれぞれのストラテジーの出現数と割合を整理したものである。

表 1 日韓の不同意表明ストラテジーの使用割合

	日本		韓国	
反対	20	24.7%	24	25.8%
対立	33	40.7%	48	51.6%
確認	18	22.2%	20	21.5%
見せかけ	10	12.3%	1	1.1%
計	81		93	

表 1 からは、次のことが確認できる。

- (a) 日韓同様に、【対立】が最も高い割合を占めており、その次に【反対】、【確認】、【見せかけ】の順で割合が高い。
- (b) 韓国語の会話では、日本語の会話に比べ【対立】の使用割合が高い。
- (c) 日本語の会話では、韓国語の会話に比べ【見せかけ】がより多く観察されており、

9) 最後まで言い切らず、形式上、述部部分が省略されている発話を分析対象とする。相手の割り込みによるものは除外する。

10) 日韓ともに、同性間の友人同士の自由会話で不同意表明は女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察されており、不同意発話の後に見られる相互行為にも日韓で類似したジェンダー差が観察されている(張 2017)。不同意表明の実例数にはジェンダー差があるものの、本稿で分析を行うストラテジー、不同意マーカ―、緩和表現の使用傾向に日韓内部の差異は大きくなかった。

その使用割合も高い。

以上のように、ストラテジーの使用割合の順には類似点が見られる一方で、それぞれのストラテジーの使用割合には日韓の差が観察される。【見せかけ】を除いたそれぞれのストラテジーは、不同意表明の発話として単独で用いられる場合もあれば（単独型）、二つ以上の表現が組み合わされて複合的に使用されている場合もある（複合型）。日韓の差は、それぞれの表現をどのように用いているかにより顕著に表れている。表2に、日韓語の会話における単独型と複合型の出現数を示す。

表2 単独型と複合型の使用割合（ストラテジー）

	日本		韓国	
単独型	45	71.4%	83	94.3%
複合型	18	28.6%	5	5.7%
計	63		88	

表2で確認できるように、日本語の会話に比べ、韓国語の会話ではそれぞれの表現が単独で不同意表明の発話として用いられる傾向が強い。まず、韓国語の会話で【対立】が単独で用いられている用例を見てみよう。

(4) 会話 MK2 【対立】 [KHM3:制約会社の仕事は大変であると話している]

01 KHM3: # # 이도 씨발 존나 힘들어가지고 그만 둔거 아냐 술 맨날 먹고 그런다고 정확한 내막은 모르겠지만

(# # も くそ めっちゃ大変だからやめたんじゃない お酒毎日飲んだりするって 正確な事情は分からないけど)

02→KDM4:그래도 다니는 새끼는 다니잖아 (でも、通っているやつは通っているじゃん)

(4) のように、韓国語の会話では、先行する相手の発話 (01 行) と対立した情報 (02 行) のみを短く発話することで不同意を表明していることが分かる。一方、韓国語の会話に比べ、日本語の会話では (5) と (6) のように複合型が多く観察される傾向がある。

(5) 会話 MJ3 【見せかけ+対立】 [文学部の研究について]

01 JNM6:有用感 (0.3) あるやん＝

02→JKM5: =いや せやけど

03 JNM6:ある [やん]

04→JKM5: [結] 局 どうでもいいやんって<@なるって@>@@

(6) 会話 FJ2 【反対+対立】 [公演の司会者について]

01 JKF4:「アー ユー ゲイ」聞いて @「イエス」って言ってるはずやん

02→JSF3:違う あれは違う た単なる男役が必要なの だから歌って歌って踊れる男の人

まず、日本語の会話に観察された複合型の中で、最も多く見られるのは(5)のような【見せかけ+ α 】や【 α +見せかけ】の組み合わせである(10例)。相手の見解に不同意を表す時、「せやけど」などのような表現を用いて相手の意見の一部あるいはこれから不同意を行う事柄について同意を表す行為は、李(2003)でも指摘されているように相手のフェイスを侵害することを緩和するストラテジー表現として捉えられる。一方、(6)のような【見せかけ+ α 】の組み合わせ以外の複合型【反対+対立】は、当たり前のことであるが、単独型に比べてより多くの情報を含んだ発話である。つまり、単独型に比べ、複合型は「なぜ不同意するのか」を相手に誤解されず、より正確に理解してもらおうとする表現方法であると捉えられる。

以上の結果から言えることとして、日韓語の友人同士の会話で選好されるストラテジーの順番には類似点があるが、韓国語の会話では【対立】の使用割合が50%以上を占めており、それぞれのストラテジーは単独で用いられる傾向が強い。それに対して、日本語の会話では、相手のフェイスに配慮した【見せかけ】の使用割合が高く、ストラテジーを複合的に用いることで、自らの不同意表明の発話を相手により正確に理解してもらおうとする傾向がある。

3.2. 日韓の会話における不同意マーカー

次に、それぞれのストラテジーがターンの始めに見られた場合、どのような不同意マーカーが日韓語の会話で使用されているかについて述べる。まず、日韓語の会話における不同意マーカーの出現数をまとめると、表3のようである。

表3 日韓語の会話における不同意マーカーの使用実態

日本語							韓国語							
	マーカー	反対	対立	確認	見せかけ	計	計	反対	対立	確認	見せかけ	マーカー		
否定	いや	4	9	3	3	19	17	7	10	-	-	아니(야)	否定	
	でも	-	11	1	1	13	9	1	6	2	-	근데		
	だって	-	-	2	-	2	4	1	3	-	-	그래도		
驚き 不整合	え	1	-	3	-	4	5	-	4	1	-	아	驚き 不整合	
	あ	-	-	1	-	1	3	2	1	-	-	에유, 아이씨, 거참		
注目	ほら	-	-	1	-	1	7	1	4	2	-	呼びかけ	注目	
因果関係	だから	-	1	-	-	1	2	-	-	2	-	그러니까, 그럴	因果関係	
曖昧化	まあ	-	1	-	3	4	3	2	1	-	-	뭐	曖昧化	
	なんか	-	-	1	-	1								
躊躇	あの	-	3	-	-	3	-	-						躊躇
	あー	-	1	1	-	2								
	うん	-	3	-	2	5								
計		5	29	13	9	56	50	14	29	7	-	計		

表3からは、次のような類似点と相違点が確認できる。

- 日韓同様に、＜否定＞マーカーの使用が最も多く＜否定＞マーカーは【対立】の前で多く使用される。
- ＜注目＞マーカーは、韓国語の会話でより多く観察される。
- ＜躊躇＞マーカーは、日本語の会話でしか観察されていない。

以上の結果から分かることは、日韓同様に友人同士の会話で参加者は＜否定＞マーカー

を用いて、これから不同意表明を行うことを相手に示しつつ効果的に不同意を表明しようとしていることである。一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では相手に＜注目＞を要求した後、自らの不同意の意見を伝えようとする傾向があるのに対し、日本語の会話でターンを取った話者は＜躊躇＞を表すことでこれから話す不同意表明の発話を緩和させようとする傾向があることが分かる。次に、ターンの始めに不同意マーカーがどのくらい使用されているか見てみよう。表4は、上述した不同意のマーカーが使用されたターン数と、マーカーの使用が見られないターン数をまとめたものである。

表4 不同意マーカーの使用有無

		反対		対立		確認		見せかけ		計	
日本語	マーカーあり	5	26%	18	78%	8	53%	6	75%	37	57%
	マーカーなし	14	74%	5	22%	7	47%	2	25%	28	43%
	ターン数	19		23		15		8		65	
韓国語	マーカーあり	12	48%	22	52%	5	24%	—	—	39	44%
	マーカーなし	13	52%	20	48%	16	76%	—	—	49	56%
	ターン数	25		42		21		—		88	

表4からは次のような日韓の差が確認できる。

- (a) 韓国語の会話に比べ、日本語の会話の方がマーカーの使用割合が高い。また、日本語の会話では不同意マーカーが使用される割合が高いが、韓国語の会話では、不同意マーカーの不使用の方が高い割合を占めている。
- (b) 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では、【対立】、【見せかけ】がターンの始めに発話される場合、マーカーの使用割合が高く、【反対】の場合はその逆である。
- (c) 日本語の会話に比べ、韓国語の会話では【反対】がターンの始めに発話される場合、マーカー使用割合が高い。

マーカーの使用有無には以上のような日韓の差が見られるが、最も顕著な相違点は、日本語の会話ではマーカーの不使用の割合よりマーカーの使用割合の方がより高い割合を占めているのに対し、韓国語の会話はその逆であるということである。このような結果から言える

表5 単独型と複合型の使用割合(マーカー)

	日本語	韓国語
単独型	21	30
複合型	16	9
計	37	39

ことは、韓国語の会話に比べ、日本語の会話ではマーカーを用いることですぐ実質的な発話を用いて不同意を表明することを避けようとしていることである。

発話の最初に不同意表明を避けようとする傾向は、ターンの始めにマーカーがどのように使用されているかにも表れる(表5)。まず、韓国語の会話では(7)のように一つのマーカーがターンの冒頭で用いられた後、実質的な不同意表明の発話が続く用例が圧倒的に多く見られる(単独型)。

(7) KSF1:야 더 나갈수도 있어 소비세두 냈지 유류세 내지

(おい もっとかかるかもしれない 消費税も出した 油類税を出す)

一方、韓国語の会話に比べ、日本語の会話では(8)と(9)のように二つ以上のマーカ―が組み合わされて用いられる用例が多く観察されている(複合型)。

(8) JGF6:あ::いや なんか あんまり あんまり英語 (0.4) 英語英語みたいな人少ない

(9) JDF5:う:ん まあ でも 勉強は楽やで

(8)と(9)のように、日本語の会話で話者は二つ以上のマーカ―を連鎖することで時間を稼いだり、「あー」、「うーん」のようにためらいを表したりしながらターンの始めにすぐ不同意を表明することを避ける傾向がある。しかし、フェイスの侵害度が最も高いストラテジーである【反対】の場合、逆に韓国語の会話の方がマーカ―の使用割合が高い。これは、【反対】の発話を会話の参加者がどのように捉えているかに関連する。日本語の会話では、【反対】ストラテジーの19例のうち11例の発話が笑い(例では@で表記)を伴っており、これらの発話は(10)のように相互行為の中で冗談フレームを構築している¹¹⁾。

(10) 会話 JM1 [高校の時、演劇で使った剣について]

01 JBM2:あれもすごかったな 本番でちゃんと折れて

02→JAM1:@<@ちゃんと折れてって ちゃんとじゃねえよ@>

03 JBM2:><@いやいや@><@ ちゃんとちゃんと立ち回ってたやん@@

(10)の02行目の発話を見てみると、話者は笑いながら【反対】ストラテジーを用いることで、「今の発話は冗談である」というコンテキスト化の合図を送っていることが確認できる。冗談であるということを笑いという非言語行動で表しているため、自らの立場を示すマーカ―なしで【反対】ストラテジーがすぐ用いられていると思われる。一方、韓国語の会話に見られる【反対】の場合、24例のうち4例のみが冗談フレームを構築しており、20例は(11)のように相互行為の中で真面目な不同意表明の発話として捉えられている。

(11) 会話 FK2

01 KHF4:여덟 시간에서 열 시간 (8時間から10時間)

02→KSF3:아냐 지치니까 더 걸려 (いや 疲れるからもっとかかる)

03 KHF4:응 오늘 출발하면 지금 출발하면 [...] 새벽 이맘쯤엔 도착하겠다
(うん 今日出発と 今出発すると [...] 夜明けの今頃には着くだろう)

11) 不同意表明の発話が「冗談」として発せられた場合、「今の発話は冗談である」ということを伝えるコンテキスト化の合図が観察されることが多く、Strachle (1993) が指摘したようにこれらの発話が「冗談」であるかどうかは、受け手側が相手の発話を「冗談」として認めているかどうかが大きく関わる。冗談フレームは、受け手側が相手の発話を「冗談」として捉えていることを示しながら相手の不同意の発話に対して、さらに不同意を積み重ね、互いに言い争う形で冗談し合うことで構築される。この点についての詳細は、張 (2017) を参照されたい。

このように、日本の友人同士の会話では、冗談として【反対】ストラテジーが用いられている傾向があるため、不同意マーカの使用割合が低いという結果が得られているのに対し、韓国の友人同士の会話で【反対】ストラテジーは真面目な不同意表明の発話として用いられている用例が多いため、マーカの使用割合が高いという結果が得られていると思われる。

以上、日韓ともに友人同士の会話では、効果的に不同意を表明するため＜否定＞のマーカが最も多く用いられる。しかし、マーカの使用割合は日本語の会話の方が高く、日本語の会話ではターンの始めにマーカを連鎖することで時間を稼いだり、＜躊躇＞マーカを用いたりすることで相手に配慮していることを示しながら不同意を表明する傾向がある。それに対し、韓国語の会話の場合、マーカを使用しない割合が高く、日本語の会話に比べ、＜注目＞マーカを用いて後続する自らの不同意表明の発話に注意させた後、すぐ不同意の表明を行う傾向がある。

3.3. 日韓の不同意表明の発話の文末に見られる緩和表現

次に、それぞれの不同意表明ストラテジーの文末にどのような緩和表現が用いられているかについて述べる。まず、表6に【見せかけ】を除いたそれぞれのストラテジーの述語数¹²⁾に対する緩和表現使用有無の割合を示す。

表6 緩和表現の使用の有無

日本語	反対	対立	確認	計		計		反対	対立	確認	韓国語
緩和表現あり	10	27	14	51	48.6%	38.7%	53	12	28	13	緩和表現あり
緩和表現なし	10	40	4	54	51.4%	61.3%	84	11	64	9	緩和表現なし
述語数				105		137		述語数			

次に、それぞれのストラテジーの文末にどのような緩和表現が使用されているか見てみよう。表7はそれぞれの緩和表現の出現数¹³⁾とその割合を示したものである。

12) ◎発話として認定するもの: A. 連体修飾節と補足節を除いた述語が含まれる節（「から」「けど」などの節）。B. 語含め、節の形はなしていないが、相手の実質的な発話でターン交替があったものと2秒以上のポーズがあったもの。C. 文末が省略されて言い切られた発話。D. 倒置された部分と述部を含め一つの発話として認定する。◎発話として認定しないもの: G. 名詞を修飾する連体修飾節と名詞として役割を果たす補足節（「こと、の、ということ」）などによって名詞化したもの。H. 一人の話者の繰り返しは、何回繰り返されても一つの発話とする。I. フィラー的なものと言い淀みは発話として認定しない。

13) 緩和表現ごとの回数を数えている。例えば、「-思うけど」の場合は「思う」1回、「言い切らない文」1回、計2回になる。

表 7 緩和表現の使用実態

日本語	反対	対立	確認	計		計		反対	対立	確認	韓国語
疑問詞/疑問語尾	—	—	7	7	13.0%	24.1%	14	2	2	10	疑問詞/疑問語尾
否定形	3	4	5	12	22.2%	34.5%	20	—	15	5	否定形
やろう	1	4	2	7	13.0%	5.2%	3	1	2	—	수도 있다
思う、感じ(だ)	—	9	—	9	16.7%	5.2%	3	1	2	—	같다, 느낌 (이다)
引用	—	5	—	5	9.3%	5.2%	3	—	3	—	引用
言い切らない文	6	12	—	18	33.3%	27.6%	16	11	5	—	言い切らない文
計	10	34	14	58	100%	100%	59	15	29	15	計

表 6 と表 7 からは、次のような日韓の差が確認できる。

- (a) 韓国語の会話に比べ、日本語の会話の方が緩和表現の使用割合が高い。
- (b) 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では言い切らない文、引用の使用割合が高く、話者の思考や推測を表す「思う」、「感じ」、「やろう」の使用割合が高い。
- (c) 日本語の会話に比べ、韓国語の会話では疑問詞/疑問語尾、否定形の使用割合が高い。

まず、韓国語の会話に比べ日本語の会話で高い割合を占めている言い切らない文、引用、「思う」、「感じ」の用例を見てみよう。

(12) 会話 MJ4 (言い切らない文)

- 01 JYM8:「あ もう 磯野カツオは もう たぶん 出世するな:」思いながら見とったわ
02→JDM7:でも なんか (0.3) う::ん 誇っていいところかどうか<@分からんけどな@>

(13) 会話 MJ3 (引用)

- 01 JKM5:「何でおいっこが出来てこいつが大変に<@なる [の] って@>@」は 話やん
02→JNM6: [@@@] いや 扶養 扶養関係がな::ってゆう

(14) 会話 MJ1 (思う)

- 01 JBM2:そんな金かかるもんなん?
02→JAM1: (5.0) 剣は結構かかったと思っていた

(15) 会話 MJ1 (感じ)

- 01 JYM8:まあ でも ちょっとびくびくしながら花火すんのも まあ
夏の風物詩っちゃ [風物詩やろ]
02→JDM7: [@@@@] でも もう なんか そこ通り過ぎた<@感じやねん@>@

(12)、(13)、(14)、(15)に見られる不同意表明の発話は、それぞれの表現は「分からない」、「扶養が大変である」、「剣は結構かかった」「そこ通り過ぎた」のように断定的に表現できる。しかし、(12)のように「分からないけど」と言い切らないことによって判断保留の態度を示したり、(13)の「扶養関係がな::ってゆう」と他人の発話を引用したように間接的に自分の意見を表したり、(14)と(15)の「思っていた」、「感じ」のように、個人的な考えであることを言語化して表すことで発話内容の力を和らげながら不同意を表明している。次に、韓国語の会話でより高い割合を占めている疑問詞/疑問語尾の用例を見てみよう。

まず、韓国語の会話では(16)のように「왜(どうして)」などの疑問詞を用いて相手に情報や意見を求めることで不同意を表明しながら相手がそのような考えを持っている理由を聞く姿勢を示す用例が多く観察される。

(16) 会話 MK3 (【確認】: 疑問詞)

01 KAM5:난 그때 ((대북방송을)) 안 끈건 잘 한거 같은데

(私はあの時((対北朝鮮放送を))切らなかったのは正しいと思うけど)

02→KDM6:왜? (どうして?)

03 KAM5: (0.3) 결과가 좋았잖아 (結果が良かったじゃん)

04 KDM6:만약에 ((핵 미사일을)) 쏘면 (1.2) 왔으면?

(もし((核ミサイルを))撃ったら(1.2)撃っていたら?)

また、(17)のように韓国語の会話ではあつけないことを表す間投詞を<驚きや不整合>マーカ―を用いたりした後、疑問語尾を用いて相手の意見に【反対】していることを明示的に表すことで不同意を表明することがある。李(2003)では、(17)のような表現を問いつめ表現としており、このような表現は聞き手領域に深く踏み込んだ発話であり、聞き手の気分を害しかねないものであるが、親しさを感じるからこそ用いられる戦略的な用法であると指摘している。

(17) 会話 MK1 (【反対】: 疑問語尾)

01 KAM2:사회봉사 하고 있잖아 사회봉사

(ボランティア活動しているじゃん ボランティア活動)

02→KGM1:아이씨 그게 대외활동이냐

((あつけないことを表す間投詞)) あれが対外((校外))活動なの)

03 KAM2:이번 주에도 가야 돼 (今週も行かなければいけない)

相互行為の観点から見ると(16)と(17)のように疑問詞や疑問語尾を伴った不同意表明の発話の特徴は、【確認】であれ【反対】や【対立】であれ、不同意表明の発話後、すぐターン交替が行われることである。つまり、話者は「なぜ不同意するのか」を語るより疑問を表す形式を用いることで相手にターンを渡して意見を導き出そうとしているということである。(15)の03行目の発話に見られるように、疑問詞/疑問語尾の不同意発話によってターンを渡された話者は、韓国語の会話で最も高い割合を占めている否定形「-잖아」(13例)を用いて相手の不同意発話に対してもう一度不同意を表明することが多い。「-잖아」は、否定疑問文が基になった文末表現が縮約された形式であるとされてきたが、否定疑問の意味は希薄化しているとされている。「-잖아」が否定疑問の機能を失っていることは、「-잖아」が【確認】では観察されておらず、(18)のように【対立】のみで用いられていることから確認できる。

(18) 会話 FK4 (-잖아)

- 01 KDF8: # #A 이가((# #C 에게))다 생각이 있었으면 너한테 찢렸을거 아니야
 (# #A が((# #C に))関心があったらあなたに話したんじゃない)
- 02→KCF7: # #B 여자친구였잖아 # #C 는 (# #B の彼女だったじゃん # #C は)
- 03→KDF8: ># #B 이랑 ((# #A 랑)) 안 친하잖아<
 (# #B と ((# #A)) は親しくないじゃん)
- 04→KCF7: 그래도 자기((A)) 친구((B))의 여자친구((C))였잖아
 (でも 自分((A))の友だち((B))の彼女((C))だったじゃん)
- 05 KDF8: 그런가 (そうか)

Shu (2002) は、「-잖아」は危険を軽減するために用いられ、聞き手から同意や確認を導く談話ストラテジーであり、説得やディベートで「-잖아」が効果的であるとしている。韓国の友人同士の不同意表明の発話の文末に見られる「-잖아」の場合、(18)のように相手のフェイスを侵害する程度を軽減しながらお互いに自分の主張の根拠や理由を効果的に伝え、相手から同意を導く機能を果たしていると考えられる。

以上のように、韓国語の会話に比べ、日本語の会話では自分の不同意表明の発話内容を和らげる緩和表現が高い割合で用いられているのに対し、韓国語の会話では相手にターンを渡して返答を求めたり、自分の意見の妥当性を伝えながら相手の同意を導こうとする相手に働きかける度合いが高い緩和表現が用いられていると言える。

4. まとめと考察

本稿の分析結果をまとめると以下のようなものである。

- (A) 日韓ともに、ストラテジーとしては【対立】が最も高い割合を占めており、その次に【反対】、【確認】、【見せかけ】の順になっているが、日本語の会話の場合、まず、話者は【見せかけ】の同意を表してから不同意を表明したり、いくつかのストラテジーを組み合わせることで不同意を効果的に表明する傾向がある。一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では、話者は一つのストラテジーのみを用いて簡潔に不同意を表明する傾向がある。
- (B) 日韓語の会話では、効果的に不同意を表明するため<否定>マーカ―が最も多く用いられているが、日本語の会話の場合、話者はターンの始めにマーカ―を連鎖したり、<躊躇>マーカ―を用いたりすることで相手のフェイスに配慮を示す傾向がある。一方、韓国語の会話では、話者はターンの冒頭で一つだけマーカ―を用いたり、マーカ―を使用せずにすぐ不同意表明の発話を用いる傾向がある。
- (C) 日本語の会話の場合、話者は自らの不同意表明の発話が相手に誤解されず、受け入れられるように発話内容を和らげる緩和表現を用いる傾向があるが、韓国語の会話の場合、話者は疑問詞／疑問語尾を用いて相手にすぐターンを渡したり、自分の意見の妥当性を伝えながら相手の同意を導くような相手に働きかける度合いが高い緩和表現を用いる傾向がある。

以上、日韓とも友人同士の会話では相手のフェイスに配慮しながら効果的に自分の不同意を表明しようとしているが、その仕方には日韓で差異が見られる。従来の多くの研究で日本人は間接的で相手に配慮しながら自らの意見を述べるのに対し、韓国人は直接的で明示的に意見を述べると指摘されてきたように、本研究の分析結果でも確かに韓国語の友人同士の会話に見られる不同意表明の発話は直接的で相手との摩擦を恐れていないように見える。このような印象は、韓国語の会話で、マーカの使用割合が低く、＜躊躇＞マーカの使用が見られないことや単独型のマーカやストラテジーの使用が多いためではないかと思われる。しかし、文末に見られる緩和表現を見てみると、不同意を表明する話者は相手に働きかける度合いが高い緩和表現を用いることで相手とのインターアクションを図って共通理解を求めようとしていることが確認できる。一方、日本の友人同士の会話の場合、確かにターンの始めにマーカを連鎖したり、言い切らない文や引用など自分の不同意発話の力を和らげる緩和表現を用いることで相手に配慮しているが、ストラテジーの使用傾向から分かるように、むしろ相手に自らの不同意を効果的かつ明確に伝えようとしているのは日本語の会話の方である。つまり、韓国語の会話の場合、相手との対立を恐れず、直接的にマーカなしで単独型のストラテジーを用いてストレートに不同意を表明する傾向はあるが、相手とのインターアクションを図る姿勢を示す緩和表現を用いることで共通理解を求めようとしていると思われる。一方、日本語の会話の場合、聞き手に自らの不同意の発話が受け入れられるように、複合型のマーカやストラテジーを用いて効果的に「なぜ自分が不同意をするのか」を相手に誤解されず明確に伝えようとしていると考えられる。

本稿では、日韓語の友人同士の会話における不同意表明ストラテジー、ターンの始めに見られる不同意マーカ、不同意表明発話の文末に見られる緩和表現を分析したが、緩和表現は文末だけではなく発話の全体に渡って現れる。この点の検討は今後の課題としたい。

会話例の文字化表記

:	音の伸ばし	@	笑い
...	強勢がおかれた音の部分	<@...@>	笑いながら
°...°	声が小さくなった発話	##	個人情報
?	疑問表現	「...」	直接話法
>....<	発話のスピードが速くなる部分	X	聞き取り不明
=	途切れなく密着した発話	-----	話題やパートの区分
[]	重なり	((...))	筆者のコメント
(数)	ポーズの秒数	[...]	省略
→	注目		

【参考文献】

- 李吉鎔 (2001) 「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究：談話構造とスキーマを中心として」『阪大日本語研究』13, pp.19-32, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
 —— (2003) 「韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究：場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に」『阪大日本語研究』15, pp.67-88, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講

座.

- 李善雅 (2001) 「議論の場における言語行動—日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『日本語教育』111, pp.36-45, 日本語教育学会.
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』14-11, pp.53-60.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 末田美香子 (2000) 「初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー」『日本語教育論集』16, pp.23-46, 国立国語研究所日本語教育基盤情報センター.
- 梶本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとにして—」『日本語学』23-8, pp.22-33.
- 鈴木佳奈 (2000) 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』9, pp.63-78, 大阪大学言語文化学会.
- 張允娥 (2017) 『友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー —同性間の会話からみる日韓差とジェンダー—』大阪大学 博士学位申請論文.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』pp.257-279, くろしお出版.
- 辻大介 (1996) 「若者におけるコミュニケーション様式変化—若者語のポストモダンティ—」『東京大学社会情報研究所紀要』51, pp.42-61, 東京大学社会情報研究所.
- (1999) 「「とか」弁のコミュニケーション心理」『第3回社会言語科学会研究大会 予稿集』pp.19-24.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, pp.19-41, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- (2002) 「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7, pp.15-31, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- 平野美恵子 (2006) 「多文化共生指向の日本語教育実習生における実習生間の話し合い分析-3ヶ月間の準備期間に構築されたティーチャー・コミュニティ-」『言語文化と日本語教育』33, pp.37-46, お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- メイナード・K・泉子 (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』くろしお出版.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.
- 楊虹 (2014) 「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ：中日接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』46, pp.87-102, 鹿児島県立短期大学地域研究所.
- 이은미 (2014) 「한일 양국의 대학생 친구 간 대화에 나타나는 헷지의 사용양상(韓・日の大学生の友達同士の会話におけるヘッジの使用様相)」『日本語学研究』42, pp.207-223.
- 이찬규・노석영 (2011) 「의사소통에서 나타나는 울타리 표현의 특성에 관한 연구: 홈쇼핑 발화 자료를 중심으로 (コミュニケーションに見られるヘッジの特徴に関する研究: ホームショッピング発話資料を中心に)」『화법연구 (話法研究)』21, pp.245-286.

이한규 (1999) 「한국어 담화표지어 ‘뭐’의 의미 (韓國語談話標識語「ま あ」の意味)」 『담화인지언어학회 (談話認知言語学会)』 6-1, pp.137-157.

Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子監訳 (2011)『ポライトネス—言語使用におけるある普遍現象—』研究社.)

Shu, K. H. (2002) The Korean sentence-final marker *cianha* in conversational discourse. *The Sociolinguistic Journal of Korea* 10-2, pp.283-309.

Straehle, C. A. (1993) “Samuel?” “Yes, dear?”: Teasing and conversational rapport. In Tannen, D. (ed.) *Framing in discourse*, pp.210-230. New York: Oxford University Press.

じゃん ゆな (韓国 慶熙大学講師・大阪大学大学院修了生)